

# 組織目標評価報告書（平成27年度）

部局名：

農学部

部局長名：

門田 充司

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p><b>①教育領域</b></p> <p><b>①-1 目標</b></p> <p>(1)平成28年度から実施される60分授業及びクォーター制の導入に向けて、カリキュラム等教育システムの再構築を行うとともに、ビジュアルによる教育の質の向上を図る。</p> <p>(2)他部局とも協力し、外国人留学生の受け入れを推進する。</p> <p>(3)キャリア教育に関するアンケートを実施し、キャリア教育の改善を図る。また、卒業生へのアンケート等も引き続き実施・分析するとともに、重要なステークホルダーである保護者との懇談会を開催し、学部教育の質の改善を図る。</p> <p>(4)農学部が取り組んできた実践型社会連携教育である「地域活性化システム論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」等の双方向型科目を引き続き開講する。また、農学部フェアと同時開催の収穫祭における学生支援を積極的に行い、学生と社会との交流を推進する。</p> <p>(5)成績不振学生に対する担任・指導教員による指導を引き続き実施するとともに農学部で導入しているアカデミック・アドバイザー・アシスタント制度を活用し、留年生の減少を目指す。</p> <p>(6)生殖補助医療技術教育研究センター及び医学部(保健学科)と協力し、生殖補助医療技術キャリア養成特別コースの充実を図る。</p> <p>(7)多様な人材を輩出できるよう全学MPコースの教育に参画する。また、国際バカロレア入試を実施し、国際化への対応を図る。</p> <p>(8)学部学生の学習意欲を向上させるため、優秀な成績を修めた学生等に対して学部長賞表彰を行う。また、学生の英語力強化のため、外部英語検定試験のスコアに応じた検定料補助制度を実施する。</p> <p><b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>(1)留年生を、同年度入学の卒業予定者の10%以内に止める。</p> <p>(2)学生のモチベーションを向上させるため、学部長表彰10件、語学検定料補助5件を目標に実施する。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>(1)カリキュラム開発経費を活用し、平成28年度から実施される60分授業及び4学期制の導入に向けて、教科書の開発、改良を含む講義材料の充実、電子黒板やiPadなどのメディア環境、実験・実習環境の整備を進めた。講義技術の向上に向け、優良講義教員による授業ビジュアルを今年度は8回に拡大し、授業終了後に担当教員と参加教員(延べ57名)で30分程度の意見交換を行った。</p> <p>(2)グローバル・ディスカバリー・プログラム設置に向けて各学部と協力するために、カリキュラムチーム及びリクルートチームに参加し、農学部の具体的な貢献内容について検討を進めた。教員の資質向上のため、アフリカ、中国、欧米から来訪者を交えて、各種の英語によるセミナーを開催した。</p> <p>(3)「学部教育に関するアンケート」(全卒業予定者対象)、キャリアサポート説明会アンケート等を実施し、結果を集計・分析した。また、保護者のニーズを把握するため懇談会を開催した。「学部教育に関するアンケート」では、9割近い学生が本学部の教育に肯定的評価をしており、「授業評価アンケート」では、全授業の平均が5段階でほぼ4.0という高い水準を維持し、3.0以下の評価はなかった。</p> <p>(4)「地域活性化システム論」を始めとする各種実践型社会連携教育を着実に実施した。受講した学生、外部参加者、実施担当教員のいずれからも、内容、意義について高評価を得た。農学部フェア・収穫祭を全学部規模で実施し、学生、父兄、地域住民、教員の交流を深めた。</p> <p>(5)各学生の単位取得、出席状況をモニターし、早い段階で成績不振学生を把握、アカデミック・アドバイザー・アシスタント(AAA)制度などを活用して必要なケアを行うとともに、担任・指導教員による指導を徹底した結果、今年度は、125名中113名(90.4%)が卒業し、留年生の割合を抑制できた。</p> <p>(6)生殖補助医療技術教育研究センターと連携し、「生殖補助医療技術キャリア養成特別コース」のカリキュラムにおける実習教育を充実させ、改善を図った。</p> <p>(7)MPコースの教育に引き続き参画し、合計4名の学生を受け入れ、卒業論文研究を含む指導を行った。また、国際バカロレア入試の選抜方法の改善を図るよう検討し、平成29年度から改正することとした。</p> <p>(8)本年度の学部長表彰は10件、語学検定料補助は6件で数値目標を達成している。</p> <p>以上のことから、学部教育の改善と国際化に向けた取り組みが十分に実施できていると考えられる。</p>
<p><b>②研究領域</b></p> <p><b>②-1 目標</b></p> <p>(1)科学研究費補助金、受託研究費等の外部資金獲得に向けた積極的な取り組みを図る。</p> <p>(2)学部内外における共同研究、地域と連携した研究活動を推進する。</p> <p>(3)資源植物科学研究所とも協力し、これまで実施してきたアジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流を進展させるとともに、アジア・アフリカ諸国の共同研究や共同プログラムの実施を推進する。</p> <p>(4)NPO法人「中四国アグリテック」の協力の下、農学部教員の産学官連携研究を推進する。また、外部資金獲得のため、各種外部資金獲得セミナー等への積極的参加を促す。</p> <p>(5)生殖補助医療技術教育研究センターと連携し、生殖補助医療技術を含む生殖科学に関する研究活動を推進する。</p> <p>(6)学部長裁量経費等を有効に活用し、若手研究者の育成が図れるよう、効果的かつ戦略的な予算配分を行う。また、新規採用となるWTT教員(1名)のテニュア取得に向けた研究・教育をバックアップする。</p> <p>(7)教員の資質向上を図るため、教員の海外派遣や語学研修を推進する。</p> <p><b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>(1)科学研究費補助金の申請については、(新規申請者数+継続件数)/教員数×100の値が100%を越える状態を維持する。</p> <p>(2)共同研究費・受託研究費について、30件以上の獲得を目標とする。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>(1)科学研究費補助金の申請では、(新規申請者数63件+継続件数37件)/教員数65人×100の値が154%となり、目標を大きく超えた。また、共同研究費・受託研究費については、目標を大きく上回る40件を受け入れ、受入金額も1億7千5百万円に達しており、外部資金獲得に向けた自助努力が反映されている。</p> <p>(2)本学及び中国四国農政局、岡山県、岡山県JA中央会の協定による産学官連携推進会議には農学部長、副学部長が参加しており、今年度も「地域活性化システム論」、農学部シンポジウム、共同研究成果発表会等を実施し、産学官連携事業に積極的に取り組んだ。今年度も資源植物科学研究所との合同セミナーを開催して人的交流と共同研究を推進した。平成27年度概要要事事業成果報告会「低炭素社会と食の安全・安心を統合した環境生命科学的研究」では、農学部教員5名が参加し、地域イノベーションに関わる情報発信を行った。</p> <p>(3)引き続きアジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流と、アフリカにおける共同研究プロジェクトを推進した。資源植物科学研究所と連携して、日本学術振興会研究拠点形成事業に参加し、ジョモ・ケニヤッタ農工大学で岡山大学から5名の教員が参加した共同セミナーを開催した。</p> <p>(4)「アグリビジネス創出フェア2015」にも3名の教員が出展し、産学官連携に向けた取組を行った。また、岡山県との共同研究で「地域特産モノの果肉障害軽減のための高度技術」を開発し、大きな成果をあげた。NPO法人「中四国アグリテック」と連携し、産学官連携による研究活動を推進した。</p> <p>(5)生殖補助医療技術教育研究センターが開催した生殖補助医療胚培養士公開セミナー「最前線からのメッセージ」に参加するなど、生殖補助医療技術に関する研究活動を推進した。</p> <p>(6)女性教員の増加に向け、平成27年度においても1名のWTT教員を採用し、メンター教員を中心として学部全体の取組として女性教員の育成に取り組んだ。</p> <p>(7)教員の教育・研究力の質向上を目的として、4名の若手教員の海外派遣を行うとともに、英語による授業の強化並びにファルティ・アンバサダの養成を目的とした、ネイティブスピーカーによる少人数クラスの英語研修は全学的に展開して12コースが開催され、111名(うち農学部30名)の参加があった。</p>
<p><b>③社会貢献(診療を含む)領域</b></p> <p><b>③-1 目標</b></p> <p>(1)農学部附属山陽園フィールド科学センター販売所や各種イベント等での農産物販売を引き続き実施し、一般市民・学生・教職員へ、新鮮で安全・安心な農産物を提供するとともに、農学・農業の重要性を社会へ発信する。また、それらの諸活動を通じ、地域社会への貢献を推進するとともに、地域農業の活性化に貢献する。</p> <p>(2)「地域活性化システム論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」、中四国大学連携フィールド演習等の双方向型の講義・実習科目を開講し、人的交流を通じた地域活性化に教職員・学生が積極的に関与し、貢献する。</p> <p>(3)グッドジョブ支援センターとの連携を強化し、引き続き「農業による福祉的雇用の促進」・「福祉的農業の確立」のためのプロジェクトを推進する。</p> <p>(4)農学部および農学部附属山陽園フィールド科学センター主催の公開講座において、児童・生徒あるいは一般市民に農学のフィールドを実際に体験してもらうとともに、農学部フェア等においても、農学の広報に努める。</p> <p><b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>(1)山陽園フィールド科学センターにおいて、大学間の共同利用実習を提携3大学と継続する。また、中四国大学連携フィールド演習2科目を開講する。</p> <p>(2)大学コンソーシアム岡山で「農場体験実習」を開講し、農学系以外の学生の受講を推進するとともに、「農家体験実習」等の双方向型の科目を開講し、地域農業者との交流を図る。</p> <p>(3)農学部及び山陽園フィールド科学センターにおいて、3課題の公開講座を実施する。</p>	<p><b>自己評価</b></p> <p>(1)フィールド科学センターでは、販売所、農学部玄関、大学生協、天満屋等における農産物販売を引き続き実施し、一般市民・学生・教職員に新鮮で安全・安心な農産物を提供するとともに、ホームカミングデーにおける農産物販売等も実施した。また、「農家体験実習」、大学間の共同利用実習である岡山理科大学・くらし作陽大学のフィールド実習、さらに、昨年度に引き続き実施した「岡大ファームマーケット イン Jテラス」等を通して、地域への情報発信や地域交流を推進し、地域農業の活性化に貢献した。</p> <p>(2)今年度も「地域活性化システム論」、「日本農業論」、「農家体験実習」、「美作まるごと食農体験実習」、「農業者との車座トーク」を発展させた「地域農業活性化実践論」、中四国大学連携フィールド演習科目である「牧場実習」、「晴れの国岡山 農場体験実習」の2科目等を、地方自治体、地域農業者等と連携して開講した。また、大学コンソーシアム岡山の開講科目である「晴れの国岡山 農場体験実習」では、食品・栄養系、教育系学部学生を他大学からも積極的に受け入れた。これらの学外関係者が参画した講義・実習科目を通して、双方向による人的交流を図り、教職員、学生が地域活性化に関与した。</p> <p>(3)「農業による福祉的雇用の促進」と「福祉的農業の確立」を推進するため、フィールド科学センターにおける農産物販売をグッドジョブ支援センターへの委託を継続するとともに、天満屋を含めてセンター販売所以外での販売も拡大し、「農業による福祉的雇用の促進」と「福祉的農業の確立」を推進した。</p> <p>(4)農学部公開講座「トマトとワガラの秘密を探ろう」、フィールド科学センター公開講座「育てて食べようおいしい夏野菜 家庭菜園のツボ2015」及び「農業公開講座「岡大ラクス博士」の3公開講座並びに「ひらめき☆ときめきサイエンス」血液型を決める糖鎖の働き、第3の生命鎖「糖鎖」って何だろう?」を開催し、地域貢献を推進するとともに農学の広報に努めた。また、農学部フェア・収穫祭や農学部シンポジウムを通して、農学・農業の重要性を社会に情報発信した。</p>

## 【総括記述欄】

教員の資質向上を図るために平成20年度から開始した授業ピアレビュー数を今年度は大幅に拡大し、授業終了後には意見交換も行った。例年開催する保護者との懇談会や学生及び就職先に対するアンケート、AAA制度や成績不振者への指導等を通じて情報の収集、分析を実施し、教育方法や内容の見直しを行った。その結果、本学部の教育や授業方法などに関して、学生、保護者及び就職先から高い評価を受けている。平成24年度から実施してきたネイティブスピーカーによる英語研修は全学的に拡大され100名を越える参加があった。さらに、4名の教員を海外派遣し、研究のみならず留学生獲得のための岡山大学のアピール等を含むファカルティ・アンバサダ活動も行った。また、生殖補助医療技術教育研究センターと連携し、高度な専門職業人の要請を目的として、医学部保健学科とともに開講している生殖補助医療技術者キャリア養成特別コースのプログラムを更に充実させた。

研究関連の取組では、NPO法人中四国アグリテックからの情報提供を活用した外部資金獲得への取組等を活性化し、多くの受託研究・共同研究を受け入れるとともに、産学官地域連携協定に基づいたシンポジウムやセミナーの開催、あるいは共同研究の実施等を積極的に推進し、アジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流も一層進展させた。また、女性教員の増加に向け、今年度は1名のWTT教員を採用し、女性教員の育成に取り組んだ。農学部は全WTT教員の1/4を受け入れており、本学における女性研究者の育成に大いに貢献している。

社会貢献の分野では、フィールド科学センターを中心に、地域営農者、地方自治体、周辺の大学等と連携して、引き続き地域活性化の取組を行った。また、販売所や大学生協、Jテラス、天満屋、ホームカミングデー等における農産物の販売を引き続き行い、地域との交流や岡大のPRに貢献した。今後も地域社会との双方向による人的交流を図り、教職員・学生が地域活性化に積極的に関与し、地域貢献を行っていく。

本年度も学部長のリーダーシップの下、学部長室を中心に学部運営を行い、教育、研究、社会貢献等全ての分野において、本学部の目標を十分に達成できたと思われる。今後も引き続き本学の目標に沿った積極的な学部運営を行っていく。